

はまぐり復活物語 ～その2～

ハマグリの種苗生産は、当初こそ技術開発を外部委託しましたが、昭和51年から組合内に研究会を発足させ、一貫した種苗生産に取り組み始めました。

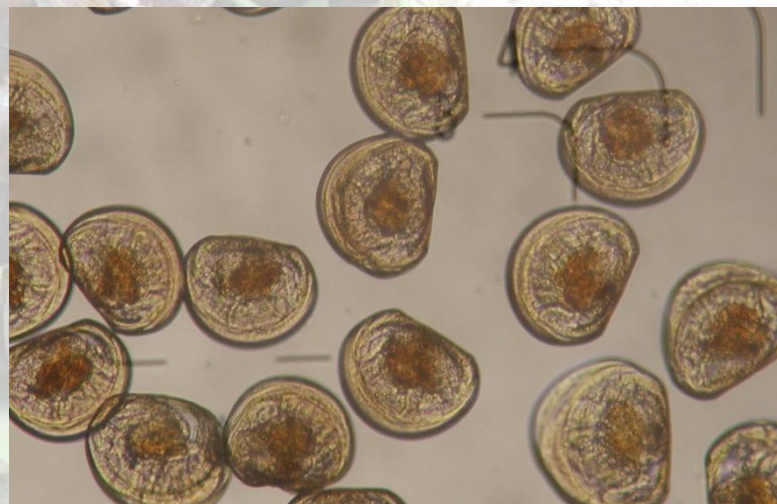
種苗生産は漁の合間に漁師自らが行い、寝る間を惜しみ、時には家庭を犠牲にしてまで種苗の管理を行いました。

当初は慣れない作業の連続で、水温や水質管理に失敗したり、餌となるプランクトンの培養がうまくいかなかったりと苦勞が絶えませんでした。試行錯誤を繰り返しながらも、徐々に安定した種苗生産ができるようになりました。

このような継続した努力の結果、活動当初は1200個しかできなかった稚貝が、近年では100～200万個生産できるようになり、毎年、木曾三川の河口付近に放流を行っています。



種苗生産施設での作業風景



施設で生まれたハマグリの赤ちゃん(D型幼生)